

●神戸で牧師をしていた頃、施設に入所されたご高齢の教会員を訪問した折、毎回、部屋に掛けられた以下の詩を彼女が朗読してくださったのを思い出します。

“Christ is the Head of this House, The Unseen Guest at every Meal, The Silent Listener to every Conversation.”

「キリストはこの家の主であり、すべての食事における見えない客であり、すべての会話の静かな聞き手である。」

目には見えないけれども、いつも神様が私の日常に主が共にいてくださることを信じるところに私たちの希望であり慰めがあります。

●古代神学者のアウグスティヌスは「神の手とは見えない仕方働きながら、見える結果をもたらす神の力のことである」と述べています。聖書では「手」は「力」という意味にも訳せる言葉が使われています。目には見えないけれども、確かにその働きを示される神の見えない手の力強さと、神への信頼を告白しているのが今日の詩編です。

この詩編は「主よ、あなたはわたしを究め、わたしを知っておられる」から始まり、いつでもどこにいても神は共におられる、と告白しています。聖書で「知る」という言葉は「愛する」という意味を含みます。つまり、私たちを限りなく愛しておられ、「見えない手」を持って祝福し、力強く導いてくださる神に心からの感謝をこの詩は歌っているのです。

●この詩はイスラエルの王ダビデが、サウル王の妬みによって迫害を受け、味方が離れ、敵が迫り来る孤独な状況の中にあって、神さまへの信頼を歌ったものとして親しまれてきました。ダビデが経験した最も大きな苦難は「孤立・孤独」です。それは私たちも折々に経験するものですが、その只中で「あなた」と呼びかけることができる存在があること、そして全てを知り、そのみ手を常に私たちに差し伸べておられる神さまを思い起こす時に、希望や深い慰めを与えられるのではないのでしょうか。

●同志社大学を創設した新島襄は2度目の渡米に際し、「私の一生は見えない手(Unseen Hands)に導かれ今日に至っている。今後も私はこの手の導くままに行くところに行くのである。」と語っています。新島襄はまた「神妙の攻手」という言葉を度々用いて、不思議な力で全てを導かれる神の働きに信頼して、困難の中、キリスト教主義学校の設立と若者たちの指導に生き抜きました。そして妻の新島八重もまた、波瀾万丈の人生において、新島襄との出会いによって見えない神の手を信じて歩んだ人物でした。彼女の愛唱讚美歌が今日の讚美歌461番「み恵み豊けき主の手に引かれて」だったと言われています。今日の詩編139編を心に覚えつつ、この讚美歌を歌い、共に主の力強いみ手に委ねて今週も歩みを続けて参りましょう。